

【研究ノート】

イスラーム過激主義とスリランカ ——イースター・テロの背景

川 島 耕 司

目 次

はじめに

- 1 スリランカのムスリム
- 2 サウジアラビアの影響とタウヒード集団
- 3 ザフランと NTJ
- 4 IS とサラフィー主義
- 5 IS と「外部作戦」
- 6 IS とスリランカ

おわりに

はじめに

2019年4月21日の日曜日はキリスト教徒たちがイエス・キリストの復活を祝うイースター（復活祭）であった。この日の8時45分からの20分間に、スリランカの3つの高級ホテルと3つのキリスト教会で連続自爆テロが発生し、250人以上が死亡した。使用されたのは過酸化アセトンというIS（「イスラーム国」）が好んで使う爆薬で、ISのテロリストによってパリやブリュッセルで使われたものと同じであった。実際、ISは指導者アル・バグダディのビデオを4月29日に公表し、この事件に言及した。そのなかでこのテロはシリアにおける3月のISの敗北への復讐であることが示された。実行犯のすべてはスリランカのムスリムである。主導したのはザフラン・ハシムという34歳の説教者で、彼自身も自爆した⁽¹⁾。

このテロに関してはさまざまな点が十分には明らかになっていない。なかでもおそらく最大の問題は、スリランカのムスリムがなぜ、どのようなプロセスを経て過激化し、外国人やキリスト教徒を標的としたテロを引き起こすに至ったのかという点であろう。スリランカのムスリム社会のあり方と彼らの過激な行動との間にはどのような関係があったのか。サラフィ・ジハード主義などと呼ばれるグローバルなイスラーム過激主義、特に IS との関係はいかなるものであったのか。過激主義の拡散を阻止し、テロを未然に防ぐための教訓をこの事件から学ぶことはできるのか。イースター・テロの背景を検討するなかで、こうした点を考えていきたい。

1 スリランカのムスリム

2012 年のセンサスによれば、スリランカの人口は 2036 万人で、そのうち仏教徒は 70.1 パーセントであった。ヒンドゥー教徒は 12.6 パーセント、イスラーム教徒は 9.7 パーセント、キリスト教徒は 7.6 パーセントである⁽²⁾。仏教徒のほとんどはシンハラ人であり、ヒンドゥー教徒のほぼすべてはタミル人である。キリスト教徒はシンハラ人とタミル人で構成されている。イスラーム教徒はスリランカでは宗教的コミュニティであると同時にエスニック・コミュニティでもある。

この島を植民地としたポルトガル人たちはムスリムたちをムーアと呼んだ。その呼称はイギリス植民地時代にも使われたが、独立を経て 1970 年代までにはムスリムと呼ばれることが一般的になった。彼らの多くはこの地域の商業における共通語であったタミル語を話す。しかしムスリムたちの言語への執着は明らかに弱い。シンハラ人の多数派地域においては子どもたちをシンハラ語学校へ入れようとすることが多い。コロomboのいくつかのモスクでは説教がタミル語ではなく、英語またはシンハラ語でなされている⁽³⁾。

ムスリムたちはタミル人とさまざまな慣習を共有してきた。たとえば両者の多くは、程度の差はあるが、母系制的な家族制度を残している。しかし彼らは

自らをタミル人であるとは認識しない。ムスリムたちは、シンハラ人ともタミル人とも違う独自のアイデンティティを構築してきたのである。19世紀末ごろにムスリムをもタミル人というカテゴリーに含めようという動きがタミル人政治家のなかにあったが、これは特にムスリムの側で強く否定された⁽⁴⁾。

イスラームは主に西アジアとの交易によってスリランカに伝えられた。中東地域と南アジア、東南アジアを結ぶ海上交易は紀元前から活発に行われていた。南インドなどではローマ帝国のコインが出土し、またキリスト教は非常に早い時期からインドに伝えられていた。この交易には多くのアラブ人やペルシャ人が従事していたが、7世紀におけるイスラームの登場を経て、特に8世紀以降のインド洋交易の中心はアラブ人ムスリムになった。スリランカにも多くのムスリムが渡来し、地元の女性を妻とした。アラビア人商人を祖先にもつという歴史から、東南アジアのムスリムと同様に、スリランカのムスリムたちのほとんどはスンナ派に属している⁽⁵⁾。

スリランカのムスリム・コミュニティの本格的なアイデンティティ形成は19世紀後半以降に、仏教徒の宗教復興運動とほぼ同時に起こった。近代化が進むなかでムスリムのエリートたちは教育の重要性を主張し、ムスリムというコミュニティへの帰属意識の高まりを求めた。彼らはイスラームの原理によって一般のムスリムたちを精神的、文化的、そして政治的に統合しようとしたのである⁽⁶⁾。ムスリム・アイデンティティの高まりのなかで、ムスリムの慣習から非イスラーム的なものを排除しようとする動きも強まった。また世界のムスリムの動向やウンマと呼ばれる世界的なムスリム共同体への関心も徐々に高まっていった。こうしてたとえば儀礼時に音楽を用いることは否定され、礼拝時の静粛性が求められるようになった。そのことが仏教徒との対立を招き、1915年のいわゆる反ムーア人暴動の一因となった⁽⁷⁾。

1948年の独立後にはイスラーム化の流れは明らかにより明確になった。アラビア語学校の数も独立後急速に増えた。1884年から1950年に設立されたアラビア語学校はわずか15校であったが、1950年から2000年の間に100校以上が創設された。その後その数はさらに増え、2019年5月の政府発表によれ

ばスリランカには317のアラビア語学校が登録されていた。これらの学校ではシャリーアの学習により大きな重点が置かれた⁽⁸⁾。

その他の面でも教育のイスラーム化とでも言うべき現象は進んだ。UNP（統一国民党）やSLFP（スリランカ自由党）に属するムスリムの政治家たちによって1960年代頃からムスリムのための政府校がつくられ始めた。ムスリムの多くはタミル語を話したので子どもたちもかつてはタミル語学校に通うことが多かった。しかし次第にタミル人教師たちによって教育がコントロールされることが問題視され始めた。こうして新規につくられたムスリムのための学校は非ムスリムとは異なる学年歴をもつなど、イスラームの文化に配慮するものとなった。そして同時に、ムスリムの教育的後進性を克服するための努力がなされた。しかしそのためにムスリムと非ムスリムの子どもたちの間の交流が妨げられるようになった。ムスリム独自の学校は明らかに民族的、宗教的分断をより深める一因になった⁽⁹⁾。近年、コロンボにおいてもムスリムだけの「インターナショナル・スクール」も増えており、ムスリムと非ムスリムの交流の場はますます減少している。こうして、マクギルグレイが言うようにムスリムたちの「自己疎外」が進んだ⁽¹⁰⁾。

多くの人々がモスクに通うようになり、モスクの数も増えた。服装にも変化が現れ、頭にタギーヤと呼ばれるレースの入った白い帽子をかぶり、髭を伸ばし、白く緩やかな上着やズボンをはく男性が増えた。1980年代から黒い外衣であるアバヤと頭にかぶるヒジャーブを身につけた女性が増加した。ムスリムの学校においては、1982年から女子生徒もヒジャーブをかぶることになった。マクギルグレイは、こうした変化は過去半世紀ほどの間に起きたものであると指摘している。彼が1969年に初めてスリランカ東部の町に来たとき、農作業を行うムスリム女性のすべては色とりどりのサリーを着ていたという⁽¹¹⁾。服装の変化に加えて、公的な場における男女の分離、ハラル認証の重視、イスラーム金融などの点でもイスラーム化の動きは顕著にみられるようになった。また、イスラーム的習慣を守るために非ムスリムとの交際を避けることがますます求められるようになった⁽¹²⁾。

イスラーム化の動きは政治的分野でも進んだ。SLMC（スリランカ・ムスリム会議）の設立はその一つである。ムスリムの政治家たちはタミル人とは距離をとり、多数派であるシンハラ人中心の全国的政党に協力することで政治的影響力を確保しようとしてきた。しかし特にタミル人武装勢力との対立から生まれる北部や東部のムスリムの声が十分に代表されていないという不満があった。シンハラ人中心の政党に属する政治家ではシンハラ人仏教徒による差別や暴力に適切に対処できないという状況もあった。こうしたなかで、カリスマ的指導者M.H.M. アシュラフ(1948-2000)を中心にSLMCが1981年に設立された。SLMCは1989年の国政選挙では4議席、1994年には7議席、2001年には11議席、2004年には10議席を獲得し、ムスリムの利益を代表する重要な政党となった⁽¹³⁾。政治文化のイスラーム化は他の面でも進み、ムスリムの政治家のスピーチからはコーランやハディースからの引用が増えた。政党の集会などでは拍手ではなく、「アラー・アクバル」の声が聞かれるようになった⁽¹⁴⁾。

ムスリムとしての政治的意識が高まるなかで、より大きな政治的権利を求める動きが顕著になった。「ムスリム自治地域 (Muslim Self-Governing Region)」という提案はその代表である。これはもともとは1980年代半ばにムスリムの学者や政治家たちによって考案されたものである。隣接しない、つまり飛び地になっているムスリムの居住区をまとめ、その地域内では警察、土地、灌漑、教育などに関する自治権を与えよという要求であった。ムスリムの学生たちはそれを2003年のオルウィル宣言として発表し、「伝統的なホームランド」、「自決権」という主張をより広く知らしめた。SLMCもこの提案を取り上げた。しかしながら、南部のムスリムたちはこの提案を支持しなかった。シンハラ人たちの反発と反ムスリム感情の高まりを恐れたのである⁽¹⁵⁾。実際、ムスリムたちが自治、あるいは「自決権」を求める政治的主張を強めるにつれ、シンハラ人仏教徒たちの反発も高まっていった⁽¹⁶⁾。特に2009年の内戦終了後には仏教徒過激勢力によるムスリムへの嫌がらせや暴力が多発するようになった。

2 サウジアラビアの影響とタウヒード集団

上述したように、ムスリムたちのイスラーム化と政治へのより積極的な関与を求める動きは独立後明らかに進行していた。こうしたなかで、信仰をより徹底的に純化しようとする動きが1970年代後半ごろから顕著になった。スリランカでは1977年に経済自由化政策が導入されたが、この頃からイスラーム学者たちはグローバルなイスラームとより頻繁に交流するようになった。人的交流は盛んになり、サウジアラビアからワッハーブ派の説教師が直接来訪することもあった。またサウジアラビアの大学において奨学金を得て学ぶ学生たちも増加した。さらに、多くのムスリムたちがオイルマネーで豊かになった中東地域に出稼ぎに出るようになった。帰国した学生や労働者の多くはワッハーブ派のイデオロギーを宣伝した。彼らは、より純粋で文献に基礎をおく信仰を求め、シンハラ的、タミル的、あるいはインド的な文化の影響を受けたスーフィー信仰を批判した。サウジアラビアからの大規模な資金提供はこうした動きをさらに促した⁽¹⁷⁾。

サウジアラビアの個人や団体がワッハーブ派の拡大を図ったのはスリランカにおいてのみではなかった。彼らはワッハーブ派の主張を世界各地に拡散するために、あるいはイラクやシリアのワッハーブ派の武装組織の活動のために多額の資金を提供した。サウジアラビアから世界に流れた資金はこの何十年かで1000億ドルであるとも、あるいは2007年の段階で年額20億ドル、2015年にはその倍ほどであるとも言われている。イギリスにおいてもその傾向は顕著で、この国のイスラーム過激主義への資金は主にサウジアラビアからのものであると指摘されている。イギリスでは2007年にはサラフィー主義あるいはワッハーブ派と関連するモスクは68であったが、その7年後には110になっていた⁽¹⁸⁾。カザフスタン、ミャンマー、バルカン地域、パキスタン、セネガル、ギニア、インドネシアなどでもサウジアラビアの影響は見られる⁽¹⁹⁾。

ワッハーブ派的な影響が強まるにつれて、スリランカのイスラームの主流であったスーフィー信仰はますます批判されるようになっていった。スリランカ

には何世紀にもわたるスーフィズムの伝統がある。その中心となるのはアラーと人間との中間に位置するとみなされるスーフィー聖者への崇敬である。スリランカには聖者廟が多数あり、多くのムスリムたちが現金や食べものを供え、現世利益を祈願している⁽²⁰⁾。

こうしたスーフィー的伝統に対してはサウジアラビアなどの影響が強まる前にもさまざまな批判運動が起こってきた。伝道協会（タブリーグ・ジャマート :Tabligh Jamaat）と呼ばれる団体の活動はその一つである。この運動は1920年代にインドのムスリムによって始められたもので、1950年代にはすでにスリランカで活動を行っていた。彼らは、イスラームが何世紀にもわたって拡大するなかで取り入れた「望ましくない」習慣を教育によって「純化」することを求め、20世紀末ごろから多くの支持者を得るようになった。彼らは日々の礼拝や服装に関して彼らが考えるところの本来的なイスラーム的实践を求めたのであったが、政治にはあまり関心を示さなかった。また、スーフィー的神秘主義、瞑想、聖者崇拜は、奨励はしなかったが、認めてはいた。同様の運動で、教育を受けたミドルクラスに受け入れられたのはイスラーム協会（Jamaat-i-Islamiya）の運動であった。この運動も1950年代から活動を続けているが、政治的動きからは距離を置いていた⁽²¹⁾。

近年の特徴は、これらの比較的穏健なイスラーム主義運動に比べてきわめて過激な運動が次第に台頭してきたことである。それらはスリランカではタウヒード集団、あるいはワッハーブ派と呼ばれることが多い（タウヒードとは神の唯一性を示す概念である）。彼らはワッハーブ派、あるいはサラフィー主義の国際的なネットワークのなかの一つとして位置づけられ、特にサウジアラビアや他のペルシャ湾岸諸国との強いつながりをもっていた⁽²²⁾。サラフィー主義のなかでもおそらくもっとも過激で暴力的な思想はサラフィ・ジハード主義などとして括られるものである。これは、ムハンマドと同世代から第3世代のムスリムであるサラフたちが実践したイスラームだけが真正であると考え、かつ、その「真のイスラーム」を武力によって実現しようとする思想である⁽²³⁾。

タウヒード集団の動きがスリランカで目立つようになってきたのは2000年

代初めごろであった。彼らの動きをメディアは「イスラーム原理主義」、「オサマ・フロント」などと呼んだ。東部のムスリム居住地域などでは明らかにサラフィー主義、あるいはワッハーブ派の影響が現れるようになった。彼らは多くのマドラサをつくり、厳格なイスラームに基づく教育を行い、スーフィー派を批判した。その結果、スーフィー派との暴力事件が発生するようになった⁽²⁴⁾。

スリランカのタウヒード集団が当初批判のターゲットとしたものの一つはダウリ制度（花嫁の側からの持参金制度）であった。ダウリはタミル文化でありイスラーム的なものとは異なると彼らはみなした⁽²⁵⁾。スーフィーの聖者廟で行われるカンドーリ祭と呼ばれる儀礼も批判の対象となった。1970年代にはこの祭りがスーフィー的な行為であると考えるムスリム農民はまったくいなかったと指摘されている。しかしながら、スーフィー的な礼拝様式は近年ますます激しく攻撃されるようになった⁽²⁶⁾。

スーフィズムへの批判は時にきわめて暴力的になった。1996年にはカーターンクディ（スリランカ東部にある人口5万人ほどの町）に設立されたスーフィー派の瞑想センターが放火された。1998年には同じくカーターンクディのスーフィー派の指導者が殺された。2004年には「ジハード」の名の下に瞑想センターが放火された。図書館やスーフィー派の住宅や商店が破壊され、スーフィー派の一人が殺された。その後、2006年にはスーフィー派の指導者の死去と埋葬をめぐる対立と暴動が発生した。さらに2009年2月にはウクウェラ（Ukuwela: キャンディの北にある町）にあった設立150年の霊廟がタウヒード集団によって破壊された。2009年7月にはスリランカ南西沿岸部の都市ベルウェラにおいてワッハーブ派とカディリー派（Qadiri）スーフィー教団との間で暴力事件が発生し、2人が死亡した⁽²⁷⁾。

過激なサラフィー主義者たちの多くは当初タウヒード・ジャマート（The Thawheed Jamaat: 一神教団）という団体に属していたが、この団体はその後いくつかに分裂した。コロンボに拠点を置くダレス・サラフ（Dharus Salaf）、全セイロン一神教団（All Ceylon Thawheed Jamaat）、スリランカ一神教団（Sri Lanka Thawheed Jamaat）、パッティカロアを基盤とするダルル・アダール

(Dharul Adhar), そしてカーッターンクディの NTJ (National Thawheed Jamaat: 国民一神教団) である。イースター・テロを引き起こしたのはこの中でもおそらくもっとも過激な団体である NTJ であった⁽²⁸⁾。

3 ザフランと NTJ

NTJ の指導者はイースター・テロで自身も自爆したザフラン・ハシム (Zahran Hashim) であった。ザフランは 1985 年に前述のカーッターンクディで生まれた。この町ではムスリムが多数派を占めており、60 以上のモスクがあるが、その大半はワッハブ派のイデオロギーの影響を受けていると言われる。今回のテロを行った者たちには富裕な家庭出身者が含まれていたが、ザフランの家は貧しかった。2 部屋の家に両親と 5 人の子どもが暮らしていた。彼は 12 歳の時にアラビア語学校に入学したが、聖典の解釈をめぐる教師たちと対立し、追放処分となった。よりラディカルなイスラームを求め、彼は前述のスリランカー一神教団に加わった。彼はこのときすでにインターネットでジハードを呼びかけたりしたと言われるが、彼の思想はこの団体にも過激すぎた。そのためザフランは彼自身の組織、つまり NTJ を設立したのである⁽²⁹⁾。NTJ は 2016 年にその幹部が「人種的煽動」で逮捕されたこと、2017 年 7 月にはシンハラ人仏教徒コミュニティに対するヘイトスピーチを行ったこと、そして 2018 年 12 月のマワーネッラにおける四体の仏像への破壊行為を行ったことで知られるようになっていた⁽³⁰⁾。この破壊行為は宗教間の暴動を引き起こすのが狙いだったと当局はみている⁽³¹⁾。

ザフランがますます過激化したとされるのは 2016 年末ごろであった。彼はその演説のなかで公然と IS を支持するようになった。後述するように、2016 年にはテロを呼びかける IS の声明が出され、ヨーロッパなどでテロが頻発した。こうした動向とザフランの過激化とはおそらく関係している。2017 年にはじめには彼はカーッターンクディで公的な建物を借りて 90 分以上の演説を行い、シリアの IS への支持を呼びかけた。会場は満員で、その中には政府の治

安当局、情報機関の人々も含まれていた。それゆえ、少なくともこの時点で、ザフランの危険性は当局にはかなりの程度知られていた。その上この演説直後の2017年2月3日には穏健派のムスリムたちがザフランに関する情報を当局に報告していた⁽³²⁾。

2017年3月10日にはザフランとNTJはカーッターンクディで公開の討論会を開催したが、そのときNTJが持ち込んだのは刀と棒と火炎瓶であった。当然のことにように暴力沙汰が起こった。NTJの何人かは逮捕されたが、ザフランは逃走に成功した。モルジブカインドに逃げたとされている。その後のザフランの足取りは必ずしも明確ではないが、この時期にインドにおいてISの戦闘員と接触したという見方もある。

実際、ザフランは逃走中に明らかにさらに過激化した。2018年3月には仏教徒過激派によるムスリム襲撃を中心とするキャンディ暴動が発生した。その月にザフランはビデオを公表し、スリランカの非ムスリムを殺し、警察を襲撃し、国中で爆弾を爆発させるべきだと主張した。この時もビデオは穏健派のムスリムたちによって警察に手渡された。これによってスリランカ政府はさらにザフランの危険性を認識したと思われる。そして実際、2018年11月には2人の警察官が殺された（この警察官殺人がNTJの仕業であることはイースター・テロ後に判明した）。ザフランは自らもテロの準備を進めたが、2018年12月にはマワーネッラにおける仏像損傷事件において逮捕された者の証言から、爆弾等の隠し場所が判明した。あるココナッツ農園を警察は2019年1月17日に捜索し、4人を逮捕し、同時に100キロの爆発物、ワイヤーコード、武器、弾薬などを押収した⁽³³⁾。こうした押収物はスリランカ政府に対してザフランの危険性を明らかに決定的に知らしめることになった。

ザフランはその演説の力によって人々を引きつけた。彼の思想はISの主張をインターネットで知ることですます過激になっていった。逆に彼自身もタミル語のウェブサイトを立て、人々に影響を与えた。彼の名は南インドのタミルナドゥ州やタミル語話者の労働者が暮らす中東の湾岸諸国でも知られるようになった。おそらくインターネット上のつながりがきっかけとなり、彼

はその後タミルナードゥ州やケーララ州に滞在し、ムスリムの過激主義者たちと交流した。このとき彼はISの大義を主張し、ISに参加するように人々に訴えた⁽³⁴⁾。

ISはタミルナードゥ州のコインバトルに支部をつくっていたこと、そしてその支部とザフランとの間にかかなりの関係があったことがインドのNIA（National Investigation Agency 国家捜査局）の調べで分かっている。NIAはこの支部を捜索し、ザフランの大量の演説記録と彼がバングラデシュとアフガニスタンのISの戦士たちと通信したことを示す電話記録を見つけた⁽³⁵⁾。

明らかにザフランはISにきわめて深く共感するようになっていた。その結果、彼の問題関心の多くの部分はローカルなものよりもグローバルな過激主義のアジェンダで占められるようになったとみて間違いはないだろう。オーストラリアなどの大学で教鞭を執ったアミール・アリは故郷のカーターンクディで2017年ごろにたまたまほとんど40年ぶりに金曜礼拝に出席したときのことを書いている。彼によれば、その時の説教のほとんどはキリスト教徒やユダヤ教徒、あるいは作家のサルマン・ラシュディやタスリマ・ナスリン（バングラデシュの人権活動家）への攻撃に費やされていた⁽³⁶⁾。この時期は前述したようにザフランがますます過激化した時期ではあったが、残念ながらこの説教がザフランのものであったか否かはわからない。しかしたとえこれがザフランのものでなかったとしても、ザフランの思想にきわめて近いものであったことは間違いないように思われる。

4 ISとサラフィー主義

ISの視点からすると、これまで見てきたようなスリランカのタウヒード集団の動きは、彼らのグローバルな戦略の成果の一つであった。ISは世界各地のムスリムたちに対して、イラクやシリアでの戦闘に参加すること、そして欧米などにおいてテロを引き起こすことを求めている。ISそのものの成り立ちとそのグローバルな拡大、そしてスリランカとのつながりについてみていきたい。

ISの源流はヨルダン人ザルカヴィーがシリア北部で1999年に創設した「タウヒードとジハードのジャマート」（Jama'at al-Tawhid wal-Jihad）であると言われる。この集団はその後2003年のイラク戦争開始後にイラクに入り、「イラクのアルカーイダ」となった⁽³⁷⁾。ザルカヴィーの組織はその後「イラクのイスラーム国」と称するようになった。2010年ごろから勢力を拡大させ、2013年にはシリアの勢力との合併を宣言し、「イラクとシリアのイスラーム国」などとして知られるようになった。その後ISはアルカーイダとは一線を画し、指導者バグダディをイスラーム世界の「カリフ」であると宣言した⁽³⁸⁾。カリフ国は統一されたグローバルなイスラーム教徒のコミュニティであるウンマの上に成り立つものであるとされる⁽³⁹⁾。

ISを含む暴力的なジハード組織の多くはサラフィー主義を受け入れ入れているといわれる⁽⁴⁰⁾。サラフとは初期イスラームの先達という意味であり、サラフィー主義はサラフの行動や信仰を踏襲しようとする運動である。サラフィー主義を唱えた重要な人物の一人がエジプト人ウラマー（イスラームの知識人）のムハンマド・アブドゥ（1849-1905）であった。彼やその一派の思想を大塚和夫は以下のように要約している。

ヨーロッパ即ちキリスト教徒からなる植民地主義勢力に対して、ムスリム側が政治・経済・軍事・技術で劣勢である事実は否定しようがない。それは、イスラームがキリスト教より劣っているからだという考え方があるが、それは誤りである。そうではなく、ムスリムと自称している者たちが「真性の」イスラーム、即ちサラフのイスラームを実践しておらず、そのため真の意味でのムスリムではないところに問題の根源がある。サラフは真のムスリムであった。ゆえに、彼らの時代にはイスラーム共同体は強力であり、大帝国を築くことができたのである。したがって、われわれがサラフに従い、真のムスリムとなれば、ヨーロッパ・キリスト教徒の侵略に十分に対抗できるのである⁽⁴¹⁾。

このようにサラフィー主義にはヨーロッパやキリスト教徒による支配への対抗意識が含まれている。彼らは、植民地主義を克服するためには真のムスリムと

なるべきであると考えたのである。ただサラフとは何かに関する明確な規定はなく、さまざまな解釈が存在した。そのためサラフィー主義の定義に関する統一的な見解もなく、もともとは多様な要素を含むものであった。しかし今日ではこの思想はワッハブ派の強い影響下にあると言われる⁽⁴²⁾。

サラフィー主義に従う多くの集団と同様に、ナショナリズムはISによって否定されるものの一つである。彼らはナショナリズムとそれに基づく国民国家制度に関しては、強い拒否の姿勢を示している。バグダディは「地上はすべてアッラーのもの。国家はすべてムスリムたちのもの」と述べた⁽⁴³⁾。イスラームとナショナリズムの関係が多様であることは事実である。パキスタンなどのように国名にイスラームがつく国家も存在している。しかしより急進的なイスラーム主義はナショナリズムと敵対関係になることが多い。彼らは世俗的なナショナリズムを批判するが、それはネイションという新たな偶像を崇拝することになると考えるからである。急進的なイスラーム主義者にとっては、ナショナリズムは偶像崇拝であり、イスラームが厳禁する多神教に匹敵するものなのである⁽⁴⁴⁾。

ネイションを明確に否定し、確固たるグローバルなムスリム共同体としてのカリフ国の樹立を目指したことが世界各地から多くの支持を集めた原因の一つであることは間違いない。実際、欧米からもイラクやシリアでの戦闘に参加するために多数の人々が集まった。ISへの共感の基底には、明らかにアイデンティティに関わる問題がある。イラクのスンナ派の人々の多くは民族的、宗教的な排除や差別を経験するなかでISを支持するようになった。同様に、きわめて多数の欧米からのISへの志願者たちには、帰属への欲求、新たなアイデンティティへの逃避、冒険心があったとされる。「圧制者に対して死を宣告する」ことによって生まれる「全能感という幻想」もまたISに人々を引きつける要因となった⁽⁴⁵⁾。さらに、自殺願望や暴力志向を持つもの、あるいは、殉教や殺人など普通の社会では絶対にできないことを望む若者たちもいたという⁽⁴⁶⁾。

ISの思想や運動にはナショナリズム運動と同様に周縁化された人々に尊厳を与えるという側面をもっていた。グリーンフェルドが言うように、イスラ

ムはムスリムたちにとってはきわめて大きな「尊厳資本（dignity capital）」である。イスラームは偉大な宗教であり、信者たちにとっては他の宗教より道徳的に優越しているものであり、また過去においては征服によって強大な政治的権力を握っていた⁽⁴⁷⁾。こうした偉大な宗教を信じる信者のコミュニティに属することから生まれるアイデンティティ、あるいは尊厳という感覚は明らかに多くの人々をイスラーム過激主義に向かわせる一因となった。多くのISへの参加者たちは主流社会の文化からも、親の文化からも疎外されていると感じていたので、彼らにはグローバルなイスラーム運動は大きな魅力であった。

人々をISに勧誘したルートの一つは前述したようにサウジアラビアなどの援助によって世界各地につくられたモスクやマドラサと呼ばれる教育施設であった。刑務所もまた大きな役割を果たしたといわれる。社会に絶望した人々が軽微な犯罪を繰り返し収監されるなかで過激思想に近づいていった。そしてもう一つの経路はソーシャルメディアや過激なムスリムのサイトであった⁽⁴⁸⁾。多くの人々がヴァーチャルな空間でISを知り、過激化した。すでにみてきたようにスリランカのムスリムの過激化にもその多くが当てはまる。

5 ISと「外部作戦」

ISは「外部作戦（external operations）」としてヨーロッパやアジアでの多くのテロに関与した⁽⁴⁹⁾。ISのこの「外部作戦」、つまりテロへの訴えはきわめて過激、あるいは冷酷であった。それは「不信仰者」である欧米等の市民への無差別の暴力を肯定し、喚起しようとするものであった。2014年9月21日に出されたISの主任報道官であったアドマニの声明はそれをもっともよく表していると思われる。彼は次のように述べた。

不信仰者のアメリカ人やヨーロッパ人——特に意地が悪く不潔なフランス人——あるいはオーストラリア人、またはカナダ人、あるいは戦争を行っているイスラーム国に敵対する同盟を組む国々の市民を含むいかなる不信仰者を殺すことができる

なら、アラーに依存し、いかなる方法、あるいはどんなやり方であろうと可能なやり方で殺せ。誰のアドバイスを求めることなく、また誰の判断をも求めるな。不信仰者は市民であろうと軍人であろうと殺せ。なぜなら彼らには同じ裁定が下っているからである。両方とも不信仰者であるのだ。(中略)

たとえ IED や弾丸が見つからなくても、不信仰者であるアメリカ人、フランス人、あるいは彼らの同盟者を見つけ出せ。石で頭を打ち砕き、ナイフで殺戮し、あるいは自分の車でひき殺し、あるいは高いところから投げ落とし、あるいは首を絞め、あるいは毒殺せよ。(中略)それができなければ、家、車、仕事場を焼け。あるいは収穫物を焼け。もしそれができなければ顔に唾を吐け⁽⁵⁰⁾。

実際この声明の後に、多くのテロが発生した。2015年11月13日のパリ同時多発テロはその一つであった。ISはこのとき初めて正式の犯行声明を出した。これは最初にコーランを引用する文章で、「カリフ国の戦士たち」による「欧州の春と悪徳の都、先導的な十字架運搬者——パリ」に対する攻撃であると述べた⁽⁵¹⁾。

民間人に対する殺人を欧米に居住するISの支援者などに向けて呼びかけるISの声明は2016年5月22日にも出された。その中には「おまえたちが民間人を標的にすることは、われわれにとってより重要であることを知るがよい。十字軍にとっては、そのほうがより被害が大きく、効果的であるからだ。立ち上がれ。おまえたちは、ラマダーン月に大いなる報酬と殉教をえるだろう」とあった⁽⁵²⁾。

民間人を標的にするほうがより重要であるという恐るべき声明であるが、実際、これに呼応するような形で特に2016年7月にはテロが頻発した。14日にニースでトラックが花火見物の群衆に突っ込み、84人が死亡した。18日にはドイツの列車内でアフガニスタン人の少年が斧やナイフを振り回し、3人が重体になった。26日にはノルマンディーのキリスト教会が襲われ、一人の神父がひざまずかされて殺害された。これらの事件に対してISは「カリフ国の戦士」によるものだとする声明を出した⁽⁵³⁾。ヨーロッパにおいてはそのほかにも多数のISによるテロが発生している。マンチェスター・アリーナ爆破事件(2017

年5月22日）、ロンドン橋・バラマーケット襲撃テロ事件（2017年6月3日）、2017年バルセロナテロ攻撃事件（2017年8月17日）などである⁽⁵⁴⁾。

6 IS とスリランカ

南アジアにはISがその勢力を拡張する豊かな土壌があるとされているが、ISの活動は中東やヨーロッパに比べれば明らかに少なかった。ただいくつかのISとの関連を示す事件はすでに発生していた。2016年のダッカ・レストラン襲撃人質テロ事件はその一つである。これは2016年7月1日にダッカのカフェレストランを武装グループが襲撃したもので、日本人7人を含む22人が死亡した事件である。この事件に対してもISがインターネットを通じて犯行声明を出した。「22人の十字軍」を殺害した、「十字軍の市民たちは、十字軍の飛行機がイスラーム教徒を殺害している限り、戦士による攻撃から逃れて安全を得ることはできない」などと彼らは述べた⁽⁵⁵⁾。

ISの影響はスリランカにもおよび、ISの戦闘に参加するスリランカ人も出始めた。2015年11月にはISの英語機関誌である『ダービク』が、ISのために戦った最初のスリランカ国籍の者の空爆による死を伝えた。この人物はムハンマド・ムシン・シャルファズ・ニラム（Muhammed Muhsin Sharfraz Nilam）という。彼はパキスタンの国際イスラーム大学で学び、コロンボ大学でウルドゥー語講師をしていた。彼は、両親、妻、6人の子どもを含む16人でシリアへと移住していた。ニラムの他に彼の義理の兄弟であるタジュディンという人物がISに戦士として参加したとされる。ニラムがISの思想に深く傾倒していたことは間違いない。彼はフェイスブックに彼の考えを記していたが、彼がカリフとみなすバグダディの写真とともに「われわれはあらゆる男、女、子ども、シリア派、スンナ派、ゾロアスター教徒、クルド人、キリスト教徒を殺すだろう」と書き込んでいた⁽⁵⁶⁾。

ISの軍事行動に参加するのではなく、スリランカ国内においてISの「外部作戦」の呼びかけに応じたのがすでに見たザフランのグループであった。こう

して彼らは、2019年4月21日のイースターの朝に、コロomboの3つの高級ホテルとコロomboとネゴンボとバットикаロアのキリスト教会で自爆テロを行った。ムスリムとはそれまでほとんど敵対関係になかったキリスト教徒がいかなる過程を経て標的にされたのかは必ずしも明らかではない。しかし、何らかのISの指示があったのではないかという指摘もある。つまり、NTJが次の仏教徒との対決に備え、武器を蓄えていたのであるが、その中に爆発物があることを知ったISが彼らに「欧米的な」シンボルを狙うよう説得したと複数の専門家が指摘しているというのである⁽⁵⁷⁾。ただ、実際にこうした指示があろうとなかろうと、ISの思想に極度に傾倒していた者たちにとっては、キリスト教徒や欧米人が最大のターゲットになり得たことは間違いない。NTJの行動に一貫性があったことは確かであろう。欧米人やキリスト教徒を標的にしたテロは、ある意味ローカルな敵である仏教徒へのテロよりもIS的世界観のなかではるかに重要であろう。こうした視点は前述のカーター・クディの説教師の説教、あるいはシリアで死んだニラムの発言からも明らかであるように思われる。

ISはこのテロの後、「同盟国の国民とスリランカのキリスト教徒を標的とした攻撃」であるとする声明を出した⁽⁵⁸⁾。また、このテロをISが歓迎したのは、イラクとシリアでISのカリフ国が消え去った後、領土をもたなくても大きな脅威を与えることができるのだということを、そしてISは敗北したのではなく、状況に応じて再編成し、戦略を変えうることを世界に示そうとしたのだとみられている⁽⁵⁹⁾。しかしながら、このテロにISがどの程度関わっていたのかについては現段階では明確には分かっていない。このテロ自体の計画や実行にISの戦闘員が直接的に関与していたことを示す証拠は得られなかったとする捜査官の発表もある⁽⁶⁰⁾。

当局によって阻止されたが、NTJは第二波の攻撃を計画していたとみられている。メンバーたちが4月19日に白い衣類を購入したことが分かっている。警察の発表では、その衣類は仏教の宗教施設への攻撃のためであった。スリランカ政府の情報部門である国家情報局(SIS)は主要な標的の一つはスリランカでもっとも重要な仏教寺院であると考えられているキャンディの仏歯寺で

あったと述べた。さらに、他のキリスト教会、イスラームのモスクも攻撃対象になっていた。4月26日には治安部隊によって東部の都市で爆発物が発見された⁽⁶¹⁾。

このテロに関しては、計画が事前に漏れていたことが明らかになっている。インドおよびスリランカの防衛担当者からの複数の情報として、このテロの2時間前、そして何時間か前にインドの諜報担当官からスリランカ側の諜報担当官に「複数の教会に対する特定の脅威に関する警告」を伝えたことが報道されている。さらに、同様の警告は4月4日と4月20日にもなされたという⁽⁶²⁾。この報告には、きわめて詳細な情報、つまり標的となる教会、自爆攻撃という手法、首謀者がザフランの一派であることが記されていた⁽⁶³⁾。計画しているのはNTJであること、さらにはこの集団のメンバーの名前、「不信仰者」を殺すことでイスラームの拡大を目指していることなどが伝えられていたという報道もある⁽⁶⁴⁾。

シリセーナ大統領によれば、警察と防衛の最高レベルにはその差し迫った攻撃に関する情報は届いていたが、大統領には知らされなかった。ただなぜこの二人の最高責任者が大統領に伝えなかったのか、あるいはなぜ必要な措置を執らなかったかに関しては明らかになっていない⁽⁶⁵⁾。逆に、インドからの警告情報が届いたときに大統領が適切な手順を踏まなかったことを上記の二人はほめかしたという報道もある。もしそれが事実であれば、情報は大統領に伝達されていたことになり、大統領の判断に何らかの問題があったということになる⁽⁶⁶⁾。国家諜報局長（Chief of National Intelligence）であったシシラ・メンディス（Sisira Mendis）もまた大統領の判断の問題に関して同様の指摘をした。大統領はインドからの情報に対して適切な手順を踏まなかったとメンディスは証言したのである。そしておそらくそのために解任された⁽⁶⁷⁾。

テロに関する詳細な情報を事前に何度も受けながらなぜ有効な対策をスリランカ政府が実行し得なかったのかという問題の解明には明らかに大きな関心もたれている。スリランカの検事総長であるダッブラ・ダ・リヴェラはこの防衛および諜報の「間違い」は「人道に対する罪」とであると述べた⁽⁶⁸⁾。スリラ

ンカのカトリック教会の枢機卿は公正な捜査を求め、この点を明らかにするためには独立した透明性のある委員会を立ち上げるべきであると主張した⁽⁶⁹⁾。

おわりに

イースター・テロの背景として、以下の点が明らかになったと思われる。まず、イスラーム復興、あるいはイスラーム化と呼びうるような動きは19世紀後半からスリランカでは始まっていたが、1970年代以降それはさらに強まった。その大きな原因の一つは、スリランカのグローバル経済とのつながりの強化、そして特にサウジアラビアとの関係である。大規模な資金援助や人的交流によってワッハブ派の影響が強まり、スーフィー派との間に暴力的対立が生まれた。同時に、グローバルなムスリム共同体の一員としてのアイデンティティがスリランカのムスリムたちの間でより高まった。

さらに20世紀末以降の急速なグローバル化の進展、特にインターネットの普及は、サラフィ・ジハード主義などと呼ばれる過激思想の伝達、あるいは地域的な過激主義のネットワーク形成を容易にした。テロ実行犯であるザフラン・ハシムは、ネットを通じて過激主義に触れると同時に、彼自身もネットにおいてISの主張を拡散する役割を担った。彼の南インドとのつながりは彼の過激化の大きな要因になった。イスラームとナショナリズムの関係は多様であるが、ISなどの過激主義勢力の多くはネーションを偶像として否定しており、それが国境を越えた影響力の拡大をより容易にした一因となった。サラフィ・ジハード主義は、国民国家内において差別や排除を経験し、周縁化され明確なアイデンティティを形成し得ない人々へと過激主義を浸透させた。

こうした中で、テロ対策自体もグローバル化してきたことを今回の事件は教えている。テロ対策はインドにおいてはかなりの程度行われており、今回のテロに関しても事前にかなり具体的に把握されていた。さらに国際的な連携もとれており、インドの諜報部門はスリランカに対して再三詳細な情報を流していた。穏健派のムスリムたちからもザフランやNTJの危険性については何度も

指摘されていた。さらに彼らのアジトと爆薬等の発見は彼らがきわめて注意すべき人物であることを示していたし、当局は明らかにそれを認識していた。しかしそれにもかかわらずスリランカ政府側において十分な対策はとられなかった。なぜそうなったのか、どこに問題があったのかを解明することはきわめて重要であると思われる。

今日の社会ではインターネットを通じて過激主義のイデオロギーやテロのノウハウは容易に拡散する。非常に小規模なネットワークやグループ形成も可能である。国際的な移動も容易になっており、スリランカの小さな過激集団が暴発した要因にもなった。グローバル化した世界ではいかなる場所においてもテロが発生する可能性があり、その対策は十分になされなければならない。その際、テロの芽自体を摘み取ることは間違いなく重要である。そのためには社会が寛容性や多様性、あるいは平等性を十分に確保し、マイノリティを包摂し、安定したアイデンティティ獲得の場を提供することがおそらくもっとも重要であると思われる。この点において、スリランカのムスリムたちがマイノリティとしておかれている現状、特に多数派シンハラ人仏教徒からの暴力等の影響に関する分析は今後さらに詳細になされなければならない重要な課題であると思われる。

注

- (1) Amarnath Amarasingam, 'Terrorism on the Teardrop Island: Understanding the Easter 2019 Attacks', *CTC Sentinel*, 12,5, May/June 2019, pp.1-3, <https://ctc.usma.edu/app/uploads/2019/05/CTC-SENTINEL-052019.pdf> (2019年10月12日に閲覧); 'Bombs show foreign hand in Easter attacks in Sri Lanka', *The Strait Times*, 22 May 2019, <https://www.straitstimes.com/asia/south-asia/bombs-show-foreign-hand-in-easter-attacks-in-sri-lanka> (2019年10月28日に閲覧)。
- (2) Department of Census and Statistics, Population by religion, http://sis.statistics.gov.lk/statHtml/statHtml.do?orgId=144&tblId=DT_POP_SER_268&conn_path=I2 (2019年8月30日に閲覧); Roshini Wickremesinha, *Confronting intolerance: Continued violations against religious minorities in Sri Lanka* (Minority

- Rights Group International, 2016) , p.5. https://minorityrights.org/wp-content/uploads/2016/12/MRG_Rep_SriLan_Dec16.pdf (2019年8月30日に閲覧)。
- (3) Dennis McGilvray and Mirak Raheem, 'Muslim Perspectives on the Sri Lankan Conflict', *Policy Studies*, No. 41, 2007, Washington, D.C.: East-West Center, pp.10, 11, https://www.academia.edu/3157713/Muslim_Perspectives_on_the_Sri_Lankan_Conflict (2019年10月12日に閲覧)。
- (4) McGilvray and Raheem, 'Muslim Perspectives', pp.2-9; 川島耕司「スリランカのムスリム・コミュニティ——近代化とイスラーム」『国士舘大学政経論叢』第140号, 2007年, 8-9頁。
- (5) McGilvray and Raheem, 'Muslim Perspectives', pp.4,5; 川島耕司「インド・ケーララ州のキリスト教——その多様性とアラビア海交易」『アラビア海の文化誌(東西南北——和光大学総合文化研究所年報)』2002年, 25-26頁。
- (6) M. A. Nuhman, 'Sinhala Buddhist Nationalism and Muslim Identity in Sri Lanka: One Hundred Years of Conflict and Coexistence', in John Clifford Holt (ed.), *Buddhist Extremists and Muslim Minorities: Religious Conflict in Contemporary Sri Lanka* (New York: Oxford University Press, 2016) , pp.23, 24.
- (7) 1915年の反ムーア人暴動に関しては以下を含む多くの研究がなされている。Charles S. Blackton, 'The 1915 Riots in Ceylon: A Survey of the Action Phase', *Ceylon Journal of Historical and Social Studies*, 10, 1&2, 1967; A.P. Kannangara, 'The Riots of 1915 in Sri Lanka: A Study in the Roots of Communal Violence', *Past and Present*, 102, Feb. 1984; George Rowell, 'Ceylon's Kristallnacht: A Reassessment of the Pogrom of 1915', *Modern Asian Studies*, 43,3, May, 2009; Michael Roberts, *Exploring Confrontation, Sri Lanka: Politics, Culture and History* (Chur, Switzerland: Harwood Academic Publishers, 1994) ; 川島耕司『スリランカと民族——シンハラ・ナショナリズムの形成とマイノリティ集団』, 明石書店, 2006年。
- (8) Nuhman, 'Sinhala Buddhist Nationalism and Muslim Identity', p.44; '1,669 Madrasas, 317 Arabic schools registered under Ministry', *Daily Mirror*, 3 May 2019, http://www.dailymirror.lk/breaking_news/1-669-Madrasas--317-Arabic-schools-registered-under-Ministry:-Director/108-166337 (2019年10月13日に閲覧)。
- (9) Dennis B. McGilvray, 'Rethinking Muslim identity in Sri Lanka', in John Clifford Holt (ed.), *Buddhist Extremists and Muslim Minorities: Religious Conflict in Contemporary Sri Lanka* (New York: Oxford University Press, 2016), p.74; McGilvray and Raheem, 'Muslim Perspectives', p.15.

- (10) McGilvray, 'Rethinking Muslim identity', p.74.
- (11) McGilvray, 'Rethinking Muslim identity', p.15; Nuhman, 'Sinhala Buddhist Nationalism and Muslim Identity', pp.44, 45.
- (12) McGilvray, 'Rethinking Muslim identity', p.72.
- (13) McGilvray and Raheem, 'Muslim Perspectives', p.25.
- (14) Ameer Ali, 'Anatomy of an Islamist Infamy: Part I', *Daily FT*, 6 May 2019, <http://www.ft.lk/columns/Anatomy-of-an-Islamist-Infamy--Part-I/4-677589> (2019 年 10 月 13 日に閲覧)。
- (15) McGilvray and Raheem, 'Muslim Perspectives', pp. 26, 27.
- (16) Nuhman, 'Sinhala Buddhist Nationalism and Muslim Identity', p.43.
- (17) Gehan Gunatilleke, *The Chronic and the Entrenched: Ethno-Religious Violence in Sri Lanka* (Colombo: International Centre for Ethnic Studies, 2018) , pp.20, 21, <http://ices.lk/wp-content/uploads/2018/04/The-Chronic-and-the-Entrenched-Mr.-Gihan-Book-FINAL-WEB-PDF.pdf> (2019 年 10 月 14 日に閲覧) ; 'The Wahhabi Invasion of Sri Lanka', *Colombo Telegraph*, March 2013, <https://www.colombotelegraph.com/index.php/the-wahhabi-invasion-of-sri-lanka/> (2019 年 10 月 12 日に閲覧)。
- (18) Riaz Hassan, 'ISIS and the Caliphate', *Australian Journal of Political Science*, 51 (4) , October 2016, p.762; 'Report calls for public inquiry into Gulf funding of British extremism', *The Guardian*, 5 July 2017, <https://www.theguardian.com/uk-news/2017/jul/05/report-calls-for-public-inquiry-into-gulf-funding-of-british-extremism> (2019 年 10 月 12 日に閲覧) ; Farah Pandith, 'Extremism Is Riyadh's Top Export', *FP*, 24 March 2019, <https://foreignpolicy.com/2019/03/24/farah-pandith-saudi-how-we-win-book/>, (2019 年 10 月 13 日に閲覧)
- (19) Pandith, 'Extremism is Riyadh's Top Export', *FP*, 24 March 2019.
- (20) 'Sri Lanka's Muslims: Caught in the Crossfire', Report, 134, May 2007, Crisis Group, p.22, <https://www.refworld.org/pdfid/465d2a942.pdf> (2019 年 10 月 13 日に閲覧)。
- (21) Bart Klem, Islam, Politics and Violence in Eastern Sri Lanka, *Journal of Asian Studies*, 70,3, 2011, pp.743-744, https://www.zora.uzh.ch/id/eprint/52570/1/2011_KlemB_Klem_2011_JAS.pdf (2019 年 10 月 13 日に閲覧) ; 'Sri Lanka's Muslims: Caught in the Crossfire', p.22.
- (22) 'Sri Lanka's Muslims: Caught in the Crossfire' , p.22.
- (23) 佐原哲也「サラフィ・ジハード主義の歴史と『イスラム国』」『現代宗教』2018 年, 174-176 頁。
- (24) McGilvray and Raheem, 'Muslim Perspectives', p.43.

- (25) ‘Sri Lanka’s Muslims: Caught in the Crossfire’, p.23.
- (26) McGilvray, ‘Rethinking Muslim identity’, p.72.
- (27) Gunatilleke, *The Chronic and the Entrenched*, pp.21,22; ‘Sri Lanka’s Muslims: Caught in the Crossfire’, p.24; ‘The Wahhabi Invasion Of Sri Lanka’.
- (28) Gunatilleke, *The Chronic and the Entrenched*, pp.20, 21.
- (29) Ely Karmon, *The Sri Lanka Jihadist (ISIS?) Attacks: How Real the Change?*, 2 May 2019, International Institute for Counter-Terrorism, <https://www.ict.org.il/images/The%20Sri%20Lanka%20Jihadist%20Terrorist%20Attacks.pdf> (2019 年 10 月 13 日に閲覧) ; Tom Lasseter and Shri Navaratnam, “‘Black sheep’: The mastermind of Sri Lanka’s Easter Sunday bombs”, *Reuters*. 27 April 2019, <https://www.reuters.com/article/us-sri-lanka-blasts-mastermind-insight/black-sheep-the-mastermind-of-sri-lankas-easter-sunday-bombs-idUSKCN1S21S8> (2019 年 10 月 12 日に閲覧)。一般に、IS に参加する外国人には高等学校卒業が比較的多いものの学歴はさまざまであり、大学卒、小中学校卒もかなり含まれる。また肉体労働・非熟練労働が最も多いが、職業も多様であり、学生やホワイトカラーも含まれる。保坂修司『ジハード主義——アルカイダからイスラーム国へ』岩波書店、2017 年、183 頁。
- (30) ‘National Thowheeth Jama’ath (NTJ)’, TRAC, <https://www.trackingterrorism.org/group/national-thowheeth-jamaath-ntj-sri-lanka> (2019 年 10 月 13 日に閲覧) ; Michael Safi, “‘Mawanella was the start’: Sri Lankan town reels from bombing links”, *The Guardian*, 26 April 2019, <https://www.theguardian.com/world/2019/apr/26/mawanella-was-the-start-small-sri-lankan-town-reels-from-bombing-links> (2019 年 10 月 13 日に閲覧)。
- (31) ‘The man who might have stopped Sri Lanka’s Easter bombings’, *BBC News*, 31 May 2019, <https://www.bbc.com/news/stories-48435902> (2019 年 10 月 12 日に閲覧)。
- (32) Amarasingam, ‘Terrorism on the Teardrop Island’, p.5.
- (33) Amarasingam, ‘Terrorism on the Teardrop Island’, p.6.
- (34) Lasseter and Navaratnam, “‘Black sheep’”, *Reuters*, 27 April 2019; Karmon, *The Sri Lanka Jihadist (ISIS?) Attacks*.
- (35) Amarasingam, ‘Terrorism on the Teardrop Island’, p.7.
- (36) Ameer Ali, ‘Anatomy of an Islamist Infamy: Part I’.
- (37) 佐原徹哉「イスラム過激派のネットワークと現行世界秩序の変化」『国際武器移転史』第 1 号、2016 年、42 頁 ; Aaron Y. Zelin, ‘The war between ISIS and al-Qaeda for supremacy of the global jihadist movement’, *Research Notes*, Washington Institute

- for Near East Policy, No.20, June 2014, p.1. https://www.washingtoninstitute.org/uploads/Documents/pubs/ResearchNote_20_Zelin.pdf (2019 年 10 月 12 日に閲覧)。
こうした動き、あるいはジャマート、タウヒードという呼称とスリランカ側での「タウヒード・ジャマート」の出現には明らかに何らかの関係があるように思われる。
- (38) 北澤義之「IS の登場と『イスラーム政治』の変容」『京都産業大学世界問題研究所紀要』31, 2016-03, 212 頁。
- (39) Hassan, 'ISIS and the Caliphate', p.767.
- (40) Jessica Stern and J.M. Berger, *ISIS: The State of Terror* (London: William Collins, 2015), p.263.
- (41) 大塚和夫『イスラーム主義とは何か』岩波書店, 2004 年, 96 頁。
- (42) Stern and Berger, *ISIS: The State of Terror*, pp.268, 283. 今日のジャーナリズムやアカデミズムではサラフィー主義とワッハブ派の主張は区別することなく使われていることが多いとされる。
- (43) 北澤義之「IS の登場と『イスラーム政治』の変容」216 頁。
- (44) 大塚和夫『イスラーム主義とは何か』125-6 頁。
- (45) Stern and Berger, *ISIS: The State of Terror*, pp.75-76.
- (46) 保坂『ジハード主義』188-189 頁。
- (47) Liah Greenfeld, *Advanced Introduction to Nationalism* (Cheltenham: Elgar, 2016), p.126.
- (48) Hassan, 'ISIS and the Caliphate', p p.762, 769, 770; Stern and Berger, *ISIS: The State of Terror*, p.82.
- (49) Stern and Berger, *ISIS: The State of Terror*, p.95.
- (50) Stern and Berger, *ISIS: The State of Terror*, pp.95-96.
- (51) 川上泰徳『「イスラム国」はテロの元凶ではない グローバル・ジハードという幻想』集英社, 2016 年, 29-30 頁; 'Here is ISIS's statement claiming responsibility for the Paris attacks', *Vox*, 14 November 2019, <https://www.vox.com/2015/11/14/9734794/isis-claim-paris-statement> (2019 年 10 月 12 日に閲覧)。
- (52) 保坂『ジハード主義』191 頁; 'Islamic State calls for attacks on the West during Ramadan in audio message', *Reuters*, 22 May 2016, <https://www.reuters.com/article/us-mideast-crisis-islamicstate/islamic-state-calls-for-attacks-on-the-west-during-ramadan-in-audio-message-idUSKCN0YC0OG> (2019 年 10 月 12 日に閲覧); Jack Moore, 'A Bloody Ramadan Proves Success of ISIS's Deadly Message', *Newsweek*, 9

- July 2016, <https://www.newsweek.com/bloody-ramadan-attacks-success-isis-deadly-message-478850> (2019 年 10 月 12 日に閲覧)。
- (53) 川上泰徳『「イスラム国」はテロの元凶ではない』28 頁。
- (54) ‘Britain’s year of terror: Timeline of attacks in 2017’, *Sky News*, 15 September 2017, <https://news.sky.com/story/britains-year-of-terror-timeline-of-attacks-in-2017-11036824> (2019 年 10 月 14 日に閲覧) ; ‘Terror attacks timeline: From Paris and Brussels terror to most recent attacks in Europe’, *Express*, 18 August, 2017, <https://www.express.co.uk/news/world/693421/Terror-attacks-timeline-France-Brussels-Europe-ISIS-killings-Germany-dates-terrorism> (2019 年 10 月 14 日に閲覧)。
- (55) 川上泰徳『「イスラム国」はテロの元凶ではない』22-23 頁 ; ‘Islamist militants kill 20 in Bangladesh before commandos end siege’, *Reuters*, 2 July 2016, <https://www.reuters.com/article/us-bangladesh-attack/islamist-militants-kill-20-in-bangladesh-before-commandos-end-siege-idUSKCN0ZH5HE> (2019 年 10 月 12 日に閲覧)。
- (56) Animesh Roul, ‘Islamic State’s Sri Lankan Outreach’, *Terrorism Monitor*, The Jamestown Foundation, 13, 23, 2 December 2015, <https://jamestown.org/program/islamic-states-sri-lankan-outreach/#.VmaXxnarSUK> (2019 年 10 月 12 日に閲覧) ; Balasubramaniyan Viswanathan, ‘Islamic State in Sri Lanka’, *Situation Reports*, Geopolitical Monitor, 12 July 2016, <https://www.geopoliticalmonitor.com/islamic-state-in-sri-lanka/> (2019 年 10 月 12 日に閲覧) ; ‘First Sri Lankan Killed In Syria With ISIS: Investigate And Punish All – Muslim Council Tells Sirisena’, *Colombo Telegraph*, 21 July 2015, <https://www.colombotelegraph.com/index.php/first-sri-lankan-killed-in-syria-with-isis-investigate-and-punish-all-muslim-council-tells-sirisena/> (2019 年 10 月 12 日に閲覧)。IS は単身のみならず、一家全員でシリアやイラクに移住することを促しており、ニラムもまたそれに従ったのだと考えられる。Stern and Berger, *ISIS: The State of Terror*, p.92.
- (57) Muditha Dias, ‘The search for religious harmony in Sri Lanka after the Easter Sunday attacks’, *ABC Backstory*, 21 June 2019, <https://www.abc.net.au/news/about/backstory/radio/2019-06-20/searching-for-religious-harmony-in-sri-lanka/11228396> (2019 年 10 月 12 日に閲覧)。
- (58) Billy Perrigo, ‘ISIS Claims Responsibility for Sri Lanka Terrorist Attack’, *Time*, 23 April 2019, <https://time.com/5576053/isis-sri-lanka-easter-attack-responsibility/>

（2019年10月12日に閲覧）。

- (59) ‘Sri Lanka Attack Signals ISIS’ Widening Reach’, *The New York Times*, 25 April 2019, <https://www.nytimes.com/2019/04/25/world/asia/isis-sri-lanka.html>（2019年10月12日に閲覧）。
- (60) ‘Sri Lanka police say no evidence for direct IS link to Easter attacks’, *Reuters*, 24 July 2019, <https://www.reuters.com/article/us-sri-lanka-blasts-probe/sri-lanka-police-say-no-evidence-for-direct-is-link-to-easter-attacks-idUSKCN1UJ1IS>（2019年10月12日に閲覧）； ‘Sri Lankan investigator: No ISIL link to Easter bombings’, *Aljazeera*, 25 July 2019, <https://www.aljazeera.com/news/2019/07/sri-lankan-investigator-isil-link-easter-bombings-190724134531830.html>（2019年10月12日に閲覧）。
- (61) ‘Failure of NTJ’s second spate of orchestrated attacks’, *Daily Mirror*, 3 July 2019, <http://www.dailymirror.lk/news-features/Failure-of-NTJ’s-second-spate-of-orchestrated-attacks/131-170414>（2019年10月12日に閲覧）。
- (62) ‘Sri Lanka was warned of threat hours before suicide attacks’, *Reuters*, 23 April 2019, <https://www.reuters.com/article/us-sri-lanka-blasts-warning-exclusive-idUSKCN1RZ1EC>（2019年10月12日に閲覧）。
- (63) ‘Divided political leadership led to Easter Sunday IS attacks’, *Daily FT*, <http://www.ft.lk/opinion/Divided-political-leadership-led-to-Easter-Sunday-IS-attacks--Prof--Gunaratna/14-679897>（2019年10月12日に閲覧）。
- (64) ‘Police Warned That Sri Lanka Churches Were Targets’, *The New York Times*, 21 April 2019, <https://www.nytimes.com/2019/04/21/world/asia/sri-lanka-explosion.html>（2019年10月12日に閲覧）。
- (65) Pamela Constable and Amantha Perera, ‘Sri Lanka’s president says intelligence lapse allowed Easter bombings to take place’, *The Washington Post*, 27 April 2019, https://www.washingtonpost.com/world/asia_pacific/sri-lanka-leaders-promises-reorganization-of-security-services-in-wake-of-easter-bombings/2019/04/26/84beda66-6792-11e9-a698-2a8f808c9cfb_story.html?noredirect=on（2019年10月12日に閲覧）。
- (66) ‘Sri Lanka to charge police for “lapses” over Easter attacks’, *Business Times*, 20 June 2019, <https://www.businesstimes.com.sg/government-economy/sri-lanka-to-charge-police-for-lapses-over-easter-attacks>（2019年10月12日に閲覧）。
- (67) ‘Sri Lanka policeman defies president to testify at attack probe’, *The Times of India*, 18 June 2019, <https://timesofindia.indiatimes.com/world/south-asia/sri>

lanka-policeman-defies-president-to-testify-at-attack-probe/articleshow/69845448.cms?utm_source=contentofinterest&utm_medium=text&utm_campaign=cppst (2019 年 10 月 12 日に閲覧)。

- (68) 'Sri Lankan investigator: No ISIL link to Easter bombings', *Aljazeera*, 25 July 2019, <https://www.aljazeera.com/news/2019/07/sri-lankan-investigator-isil-link-easter-bombings-190724134531830.html> (2019 年 10 月 12 日に閲覧)。
- (69) Bharatha Mallawarachi, 'Sri Lankan cardinal urges independent probe on Easter attack', *AP News*, 1 August 2019, <https://www.apnews.com/96fc1430727c4fe5b6ac97a72bf8ce5e> (2019 年 10 月 12 日に閲覧)。